様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 26 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：２０５３０６２８
研究課題名（和文）　内科疾患における心のケアに関する実証的研究

研究課題名（英文）　Research on the mental care for internal diseases

研究代表者
河合　俊雄　（KAWAI TOSHIO）
京都大学・こころの未来研究センター・教授
研究者番号：３０２３４００８

研究成果の概要（和文）：
バセドウ病、橋本病、甲状腺腫という 3 種の甲状腺疾患患者のパーソナリティを、神経症群とも対照させつつ、質問紙、バウム・テスト、半構造化面接によって比較した。従来から心身症と考えられているバセドウ病患者はむしろ神経症に近く、橋本病、甲状腺腫の方が、感情の乏しさや、自分を守る境界の弱さなど、心身症特有のパーソナリティがあることがわかった。また治療によってホルモン値が正常化した群では、心理指標も改善していた。
研究成果の概要（英文）：
This research investigates the personality of Graves' disease, Hasimoto disease and Adenomatous nodule in comparison with the neurosis using questionnaire, Baum-test and half structured interview. According to our results the personality of Graves' disease which has been regarded one of typical psychosomatic syndromes is rather close to the neurotics while Hashimoto disease and Adenomatous nodule show typically psychosomatic features such as lack of emotion and boundary. Those patients whose thyroid hormone has been normalized inidicate positive changes in psychological indexes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：臨床心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：心身症，甲状腺疾患，心理療法，バウム・テスト，質問紙，インタビュー，アレクシサイミア，心のケア

１．研究開始当初の背景
（１）内科疾患においては、身体的治療のみならず、心のケアが重要になると思われる。その中で甲状腺疾患は、内分泌疾患の中で最も頻度が高い疾患である。甲状腺から分泌される甲状腺ホルモンは、過剰分泌の場合（バセドウ病など）は不安や焦燥感を、過小の場合（橋本病など）はうつ状態を引き起こすことが知られていて、心理的側面の重要性が指摘されてきた。特にバセドウ病に関しては、心身症の一つとして注目されてきたが、甲状腺腫を含む多様な甲状腺疾患の心理的側面

の総合的な研究はほとんどなされていなかった。
（２）筆者ら（2001）は、すでにバセドウ病患者に対してバウム・テストなどの投映法を用いた心理アセスメントを行い、従来のような精神科診断や質問紙法では捉えきれない、より本質的な人格構造を把握しうることを明らかにしてきた。それによると、バセドウ病患者は、神経症的な傾向は強くないものの、「主体」の確立に問題を持つ、神経症水準より重篤なパーソナリティーの問題を持つことが示唆された（河合俊雄ほか「バセドウ病患者の人格構造に関する研究　―投影法と心理面接を用いて―」、科学研究費補助金基盤研究Ｂ）。また 1992 年 4 月から 2005 年 3 月までの 13 年間に､4 人の臨床心理士が甲状腺専門病院である隈病院で身体医からカウンセリングを依頼された 152 例の分析では、カウンセリングでは身体的訴えはまれで、心理的な問題に関わる、本格的な心理療法が求められることが明らかにされてきた（田中美香、金山由美、河合俊雄、隈寛二、山森路子 2005　「甲状腺専門病院における心理臨床―身体医からリファーされるケースの分類と特徴―」　日本心理臨床学会第 24 回大会発表論文集ｐ230）

２．研究の目的
（１）バセドウ病のみでなく、甲状腺疾患患者は、どのようなパーソナリティを持つのかを、バセドウ病、橋本病、甲状腺腫の３つを比較し、また対照群として神経症患者を用いる。その際に、質問紙による意識レベル、投影法による無意識レベル、さらにはインタビューによって特徴を把握する。
（２）インタビューなどを通じて、甲状腺疾患の患者は、どの程度カウンセリングについての関心を持っているのかを確かめる。
（３）身体的な治療にともなって、心理的指標にどのような変化が生じるのかを調べ、特に治療によって改善が見られた群と、見られなかった群を比較する。

３．研究の方法
（１）初診面接研究
【対象者】　甲状腺専門病院に初診で訪れた 20 代～60 代の患者から無作為に抽出された 311 名の中で，診断基準に合致した 170 名を対象とした。その内訳は,バセドウ病（GD）64 名，慢性甲状腺炎（HD）38 名，結節性甲状腺腫（NG）68 名であった。また，精神科クリニックに初診で訪れた 20 代～60 代の患者から無作為に抽出された 28 名の中で，精神科医が神経症圏と判断した 22 名（NE）を対象群とした。
【調査手続き】　初診時に NEO-FFI とバウム・テスト、および半構造化面接を施行した。半構造化面接においては、
（２）縦断的研究
上記と同じ調査を 6 ヶ月後にも施行。
主にバセドウ病で、6 ヶ月後にホルモン値が正常化した群、亢進したままの群の比較を行った。

４．研究成果
（１）初診面接研究
①質問紙 NEO-FFI
　全ての値がほぼ標準域にある甲状腺疾患群に比べて，神経症群は N（神経症傾向）が高く，E（外向性）と C（誠実性）が低かった。自己報告型の質問紙検査では，神経症群特有の傾向が明らかになったのに対し，甲状腺疾患群の際立った特徴は捉えられなかった。
②バウム・テスト
先行研究を参考に，甲状腺疾患群に特徴的と思われた 39 指標を作成し，3 名の臨床心理士が評定を行った。その結果得られた各指標の出現度数について，Fisher の直接確率検定を行った。有意差の見られた項目を表 1 に示した。

表 1 バウム・テスト評定項目群間比較

評定項目	GD N=64	HD N=38	NG N=68	NE N=22	
1 樹冠あり	57+	26	43-	20	***
2 開放幹・枝	2-	7	12+	0	**
3 枝の差込	1-	4	8+	0	*
4 閉じた樹冠	19	11	16	13+	*
5 開いた樹冠	38+	16	27	7	+
9 樹幹枝差込	0-	6+	3	2	**
15 根あり	23	10	11-	10	*
16 大地あり	11-	7	26+	6	*
24 枝あり	28-	24	45	14	+
25 開放枝	9	7	21+	2	+
26 一銭枝	12-	17+	23	6	*
27 幹枝不連続	2	8+	6	1	*
28 枝垂れ下り	2	6	10	3	+
32 不自然な実	2	7	12	4	*
33 用紙全面木	15+	4	10	0-	*

+p<.10，*p<.05，**p<.01，***p<.001

HD 群は枝の差込や一線枝が多く，NG 群は樹冠がなく開放枝が多いことから，両群の病態水準の重さや自我脆弱性が確認された。GD 群ではそれらの不自然な描写は NE 群と同様に少なかった。ただし，NE 群では樹冠が閉じられるのに対して，GD 群では樹冠が開いているものが多かった。また，大地や枝が描かれず，大きな木が多いなどの特徴がみられた。GD 群は甲状腺疾患群の中では他の 2 群に比べて神経症水準に近いが，NE 群よりも自他の境界が曖昧で，他者との間で葛藤がみられにくいと考えられた。

③半構造化面接

面接内容から考えられた 52 個の評定項目を３名が評定し，内２名以上の一致がみられた項目の出現数について Fisher の直接確率検定を行った。有意差のみられた項目によって分析をおこなった。

NE 群は否定的感情や不安感の訴えが多く，他者との関係においても軋轢や隔たりを感じることが多かった。同時に，自発的な来院が多くカウンセリングへの態度も積極的であるなど，問題に自覚的で，自ら触れていく傾向がうかがわれた。一方，甲状腺疾患群ではこのような特徴は見られなかった。

群ごとに特徴をみると，GD 群は症状の自覚があり，3 群の中では身体的次元と心理的次元が比較的近いが，自己のネガティブな側面への言及は少なく，問題が心理学的なものにはなりにくい傾向がうかがえる。さらに，調査者に対する質問や同伴者との来院が多く，関係の中によりどころを求めて生きているが，それが具体的・行動レベルで表現されやすいと考えられた。

HD 群は自分の性格のポジティブな側面や周囲との円滑な関係への言及が多く，調査と無関係な話をすることも少なかった。一見適応的な印象だが，バウムテストの結果から推測すると，文脈に添っているというよりも，むしろ，ネガティブな側面を問題にし，抱えるだけのエネルギーがないとも考えられる。

NG 群は症状の自覚に乏しく，不安感や他の感情を訴えることも少なかった。自分の性格を外面的特徴によって語ることや，調査という場を意識せず無関係な話を展開することなどからも，内面性が希薄で，主体の意識の乏しいことがうかがえる。人間関係の軋轢を語ることも少なく，他者との関わりは「関係」と呼べるもの以前に留まっているのではないかと考えられた。

（２）縦断的研究

【対象者】　バセドウ病の診断基準に合致し，約半年後の来院時（初診時から 5～8 カ月後）にも調査協力が得られた 14 名。そのうち，半年後の調査時に甲状腺ホルモンの値が正常域まで低減していた９名を正常化群（平均年齢 33.7 歳，SD=3.05），高いままであった５名を亢進群（平均年齢 40.0 歳，SD=5.70）とした。

1.　NEO-FFI

両群を合わせて，初診時と半年後の５因子の得点について，対応のある t 検定を行った結果，神経症傾向を表す N が初診時よりも半年後調査時の方が有意に低かった（$t(12)=2.24$, $p<.05$）。

2.　バウム・テスト

正常化群では，個々の特徴を残しつつも，細部に注目すると，樹冠の開きが少なくなる，描線がはっきりする，地平線ができ幹下部が閉じる等，何らかの指標で境界ができる方向に変化したものが８名であった。一方，亢進群では，正常化群と同様に境界ができる方向に変化したものが２名あったが，残りの３名では境界の改善はみられなかった。

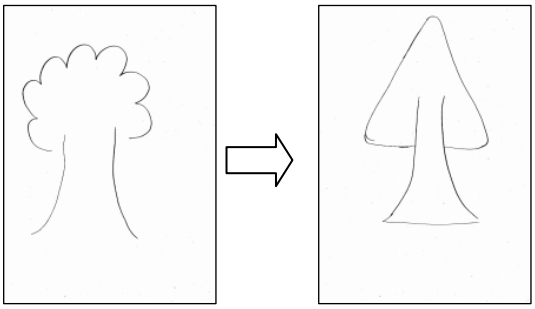

図.1　　境界ができる例（正常化群）

身体的な治療だけによっても心理的な側面の改善が認められると考えられる。

（３）研究成果のまとめ

甲状腺疾患の中で、これまで心身症と考えられていたバセドウ病は、むしろ神経症に近く、そのために心理的要因に注目されてきたと考えられる。アレキシサイミア（失感情症）と呼ばれる心身症に特有の特徴が見られるのは、むしろ橋本病と甲状腺腫であることがわかり、心理的なケアやアプローチを広げる必要が考えられる。17%の患者が心理的ケアの必要にインタビューでふれていたことは示唆的である。

身体的治療によってホルモン値が正常化した患者において、心理的指標の改善が見られたことは、単にストレスの低減によるのか、心理的変化と身体的変化が連動しているのか、今後検討する必要があろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 田中美香・金山由美・河合俊雄・桑原晴子・山森路子，甲状腺専門病院における心理臨床―身体医から依頼されるケースの分類と特徴―，診療内科，査読有，12 巻，2008，430 - 435

〔学会発表〕（計７件）

① 田中美香・金山由美・河合俊雄・桑原晴子・深尾篤嗣・梅村高太郎・長谷川千紘・鍛治まどか・谷垣紀子・窪田純久・宮内昭，バセドウ病患者のホルモン値とバウムテストの関連性，第 53 回日本甲状腺学会学術集会，2010 年 11 月 12 日，長崎ブリックホール

② 河合俊雄・長谷川千紘・梅村高太郎・鍛冶まどか・谷垣紀子・田中美香・金山由美・桑原晴子・深尾篤嗣，甲状腺疾患患者の主体性について（1）－NEO-FFI，バウムテストから－，2010 年 9 月 4 日，日本心理臨床学会第 29 回秋季大会，東北大学
③ 長谷川千紘・河合俊雄・梅村高太郎・鍛冶まどか・谷垣紀子・田中美香・金山由美・桑原晴子・深尾篤嗣，甲状腺疾患患者の主体性について（2）－半構造化面接から－ ，2010 年 9 月 4 日，日本心理臨床学会第 29 回秋季大会．東北大学
④ 梅村高太郎・鍛冶まどか・谷垣紀子・長谷川千紘・河合俊雄，バセドウ病患者における甲状腺機能の変化と心理的指標の関連－NEO-FFI とバウムテストの継時的検討から－，2010 年 9 月 4 日，日本心理臨床学会第 29 回秋季大会，東北大学
⑤ 河合俊雄，医療と心理療法の接点，第 19 回日本有病者歯科医療学会(招待講演)，2010 年 4 月 24 日，神戸
⑥ 田中美香・金山由美・河合俊雄・桑原晴子・深尾篤嗣・梅村高太郎・長谷川千紘・鍛冶まどか・谷垣紀子・窪田純久・宮内昭，甲状腺疾患患者の心理的特徴その２－心理テストによる比較研究，2009 年 11 月 5 日，第 52 回日本甲状腺学会，名古屋国際会議場
⑦ 田中美香・河合俊雄・金山由美・桑原晴子・山森路子，バウムテストからみたバセドウ病患者の心理的特徴―カウンセリング群とコントロール群の比較研究―，2008 年 9 月 6 日，日本心理臨床学会第 27 回大会，筑波大学

〔図書〕（計１件）
河合俊雄(編)，日本評論社，こころにおける身体／身体におけるこころ，2008，157

〔その他〕
ホームページ等
http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/project/2010/04/post_41.html

６．研究組織
(1)研究代表者
河合　俊雄（KAWAI TOSHIO）
京都大学・こころの未来研究センター・教授
研究者番号：３０２３４００８